

中野重治詩集

中野重治



新潮文庫

なかのしげはるししゅう
中野重治詩集

新潮文庫

草53 = 4



昭和二十六年九月十五日 発行
昭和五十四年八月三十日 三十六刷
昭和五十八年二月二十五日 四十刷

著者 中野重治

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一一

編集部(〇三)二六六一五四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

Ⓐ 印刷・大日本印刷株式会社 製本・憲專堂製本株式会社

© Masano Nakano 1951 Printed in Japan

60-4, 20 ISBN4-10-105304-9 C0192

新潮文庫

中野重治詩集

中野重治著



目

次

大道の人びと	九
浦島太郎	一四
しらなみ	一五
爪はまだあるか	一七
あかるい娘ら	一九
眼のなかに	二〇
挿木をする	二二
わかれ	二三
たんぼの女	二四
わたしは月をながめ	二六
今日も	二八
水辺を去る	二九
夜が静かなので	三〇
ぼろきれ	三三

はたきを贈る	三三
噴水のように	三五
蠅	三七
垣根にそうて	三八
最後の箱	四〇
夜の挨拶	四三
女西洋人	四四
浪	四六
たばこ屋	四八
北見の海岸	五〇
豪傑	五三
夜明け前のさよなら	五五
東京帝国大学生	五八
思える	六〇

真夜中の蟬	三	汽車 一	八七
新任大使着京の図	三	汽車 二	八九
日々	五	汽車 三	九一
歌	七	死んだ一人	九五
機関車	六	彼が書き残した言葉	九七
掃除	七	新聞にのつた写真	九九
県知事	三	新聞をつくる人びとに	一〇三
無政府主義者	四	兵隊について	一〇九
帝国ホテル 一	五	速く！速く！	一一三
帝国ホテル 二	七	朝鮮の娘たち	一二四
新聞記者	六	法律	一二七
「万年大学生」の作者に	八	『無産者新聞』第百号	一二八
ポール・クロードル	八	やつらの一家眷族を掃きだしてしまえ	一三三
道路を築く	五	壁新聞をつくるソ同盟の兄弟	一三四

待つてろ極道地主めら……………二六

夜刈りの思い出……………二七

雨の降る品川駅……………三〇

いよいよ今日から……………三三

今夜おれはおまえの寝息を聞いてやる……………三五

画壇の英雄……………三八

為替相場……………三九

わたしは嘆かずにはいられない……………四三

Impromptu I……………四四

Impromptu II……………四八

二月の雪……………五〇

うしろ書——新編について……………

新潮文庫旧版前書き……………

解 説……………

十月……………一五三

古今的新古今的……………一五四

千早町三十番地……………

そこに君は……………

君は歩いて行くらん……………

きくわん車……………一六二

その人たち……………一六五

取つて二十五へ……………一六八

竜北中学校校歌……………一六九

丸岡中学校の歌……………一七二

小野十三郎……………

一七五

一七四

中野重治詩集

編集・校訂

松

下

裕

大道の人びと

どこからともなく彼らはやつて来た

よわつた紋つきの男は高島易断たかしまゑきだんの人相見にんそうみをはじめた

紙をひろげて悪い人相を書いて人びとに示した

一つの横顔を上から下へ書いていつた

しかし眉や目や口などは

前から見たところを書いていつた

彼はうすつべらな書冊をひらひらさせた

そのなかに人の一生の運命が細大もらさず書いてあるといつた

それを読めば成功うたがないといつた

けれどもそれを売る彼はよわつた紋つきを着ていた

角帽かくぼうに袴はかまをつけた若い男は医薬分業改正案を叫んでいた

彼は医者いしやのつくる薬がどんなものであるかを発あはいてみせた

彼は一枚の紙を示してこれが処方箋だといった

彼をかこむ群集のあいだから手が出てそれを買いとつた

並木の桜の下に毛布をしいた角刈の男は手品をはじめた

おしまいに彼は自分の鼻の孔へ釘をうちこみはじめた

長い光る五寸釘を鼻の孔に入れて下駄でかんかんたたいた

釘はすこしずつ中へはいつていつた

うちこんでしまうと彼はふがふがといつてみせた

そういうあぶなつかしい藝がはじまるまで見物は立つていた

しかしそういう藝がすむと見物はそろそろ歩きだした

たいていは一銭の銭もほうらずに黙つて歩きだした

四つ辻には猿ひきがいた

ちいさな太鼓をたたきながらときどき猿を手もとへひきよせた

見物のなげた芋の皮を猿はまたたきしながら器用にたべた

——今日はお彼岸の中日だ

たくさんおもらいしろ

猿ひきが猿の顔も見ないでどなつた

どこからともなく彼らはやつて来た

数知れずやつて来た

砥石とじ

安全かみそり

キンの指輪

おつとせい 蘇鉄そてつの実み

夜は夜で朝鮮飴ちようせんあめ

それからくじびき

彼らは一様いちようにくろい顔をしていた

キンの入れ歯をしていた

あるものは暑いさなかによごれた袷あわせを着ていた

あるものは木枯こがらしのなかに麻裏草履あきうらぞうりで立つていた

どこからともなく彼らはやつて来た

そしてどこかしらこつそりと帰つて行つた

昼となく夜となく彼らはやつて来た

そしてピストルを射つたり大声に叫んだりして人を集めた

ここから内らへはいつてはいけないといつて杖で円をかいた
べらべらとしつきりなしにしやべりつづけた

見物が笑つて見ていてくれるとき

自分がよどみなくしやべりつづけられるとき

そのときが彼自身もつとも幸福であるかのように

見物が散つてしまつたり

見物の集まり具合が思わしくなかつたりすると

彼らはとなりのやはりそのような男に話しかけた

そのわずかな言葉は

通りすがりの人の耳にあわれにひびいた

寒い地方 暑い地方

諸国をまわつて来たそのわずかな言葉は

その季節季節の風のなかにあわれにしわがれて消えていつた

浦島太郎

今宵は雨がふつて

ついその家ではまた蓄音器をはじめた

童女がはかなげな声をはりあげて「浦島太郎」をうたうのだ

浦島太郎は亀にのり……

乙姫様のお氣に入り……

しらがのじじいとなりにけり……

おまえもうたつてごらん

そしてこれは誰のことをうたつたものか教えてくれ

しらなみ

ここにあるのは荒れはてた細ながい磯だ
うねりははるかな沖なかに湧いて
よりあいながら寄せてくる

そしてこの渚に

さびしい声をあげ

秋の姿でたおれかかる

そのひびきは奥ぶかく

せまつた山の根にかなしく反響する

がんじょうな汽車さえもためらいがちに

しぶきは窓がらすに霧のようにもまつてくる

ああ 越後のくに 親しらず市振の海岸

ひるがえる白浪のひまに